

 書評

ジャック・ラカン著、新宮一成 訳

精神分析における話と言語活動の機能と領野

ローマ大学心理学研究所において行われたローマ会議での報告 1953 年 9 月 26 日・27 日

兼本浩祐

大学の授業でも新刊の紹介でもあらゆるところでいかに分かりやすいかが称揚されている。しかし本当に価値あるものを獲得するために応分の労苦を代価として支払わずに済むということがあり得るだろうか。本書はその訳注をみれば分かるように、この困難な著書のできる限りの周到な道案内を提供してくれてはいる。つまり本書を読むのに必要とされる古今東西の古典やさらには当時最新の動物生態学などの博識がたとえなくても読み進めることができるように簡潔に、膨大な量の背景知識が訳注として周到に用意されている。つまりは可能な限りはラカンという険しい道のりを不必要に迷わないよう配慮はされているが、しかしそれはあくまでもこの険しい山道を登ろうと決意した登山者に対する道しるべであることに変わりない。

いくぶん挑発的なものいいかもしれないが、精神分析への一般精神科医の関心は今や死滅しつつあるといってよいのではないか。ある雑誌で認知行動療法と精神分析的精神療法の棲み分けといったテーマで特集を組んだ時に、認知行動療法を専門とする臨床心理士の大家の方から、「認知行動療法は、精神分析を歴史的に止揚して次の段階に進んだ次世代の技法なのだから、棲み分けなど言うのは全くの時代錯誤だ」という抗議をいただいたことが記憶に新しい。今世紀に入り根本的なパラダイムシフトを来した精神医学にとって、脳科学と接続可能で、エビデンスの蓄積可能な認知行動療法が精神分析的精神療法を駆逐しつつあるのはある意味必然的な成り行きとも言える。

本書はこうした時代背景の中で遅れてやってきたラカンの書であるとも言える。かつては、かなりの数の精神科医が自らの直面する臨床と場合によっては自ら自身の生きる様相を読み解く鍵がそこにあるのではないかと競い合ってラカンの関連書籍を買いつめていた時期があった。そして今や精神科医の中

でラカンは決してポピュラーな読み物ではない。しかし、フロイトの原典が流行り廃りとは無縁にいつでもそこに立ち返る価値のある 1 つの源泉であり続けているように、ラカンその人によって書かれたこの書物もおそらく人が今後何度もそこに立ち返っては自身の歩みを確認する原典となるように思える。むしろ、こじやれたファッションの 1 つとして身に着けることができなくなったこの時期にこの状況の中で本書が訳出されたことこそ、自らの考えに忠実であるためには自らの足元に集った教団をも解体して止まなかったラカンにふさわしいとも言える。百人の人に役に立つ本と 1 人の人の人生を変える本のいずれが価値ある本かを競い合うことに意味はない。ラカンは 1 人の人にとっては彼自身と彼の臨床を揺るがしめすれば救いもする言葉を語っているのである。

本書の実際の解説はあとがきを参照されるのが一番良い。ただ短時間セッションのことだけを最後に簡潔に触れておきたい。精神科医の診察場面は言葉のやり取りで成り立っているが、その終わりは物理的な時間の中にある。精神科医は対面する人達が語る言葉の可能な限り忠実な聞き取り役をめざし、自らの好き嫌いはとりあえず脇におき無人称の鏡のようにそこに立つことを訓練されるが、どこで相手の話を区切るかは贈り物の授受に似て言葉のやり取りからできたこの空間の中に物の次元を導き入れることになる。ラカンの思想とは無縁の読者であっても本書の後半で展開されるセッションの終了の意味付けは、きわめて説得力のあるものであり、心理面接に関わるすべての人に 1 つの指針を提供してくれるように思う。

(愛知医科大学精神科学講座)

 ●A5 192 頁 2015 定価：本体 4,000 円＋税
弘文堂刊